

Ⅲ 研究の成果と課題

平成27年度より取り組んできた「学級活動」を中核とした実践も、今年度で3年目のまとめの年となり、「賀来小中の学級会スタイルの確立」に向けて全職員で取り組んできた。

これまでの話し合い活動に焦点をあてた研究の中で、一定の成果を上げることはできている。今年度は評価完成期として、この2年間で積み重ねてきた話し合いのスキルを更に向上させるとともに、「発言してよかった」「行動してよかった」と感じ、学級や学年・全校のために頑張っていこうと思えるような「認め合う学級活動」をキーワードに取り組んできた。昨年度課題として残されていた「思いや願いが反映されるよりよい集団決定の工夫」「よさやがんばりが認められる振り返りの場の工夫」「折り合いのパターン化からの脱却」を重点に、期別部会や縦割り3部会で学年の枠を越えて実践や研究を進めながら、これらの課題の解決に近づくことができた。

準備や時間確保の大変さから敬遠されがちな学級会ではあるが、目的をもって計画的に行うことで、児童生徒にとって大きな力となる。学級会に対する教師のハードルを下げ、今後もこの話し合い活動を継続していくことが大切である。そのために、「いつ・どんな議題で」「何を使って」「どこまでねらった」話し合い活動をするかという「賀来小中の学級会スタイル」を確立することで、来年度以降、誰がどの学年を担当しても同じように話し合い活動を継続していくことができ、また一つ財産を残すことができたと思う。

これまでの研究の成果と、今後取り組むべき課題は、以下の内容である。

1 これまでの研究の成果

(1) 思いや願いが反映されるよりよい集団決定の工夫

- ・事前の活動の中で、一人一人が考えを持つ時間を確保するとともに、学級会シートに記録することで、自信をもって発言することができた。また、司会グループが各々の考えを把握しておくことで、効果的指名や話し合いの方向性の検討に活かすことができた。
- ・決定のよりどころとなるような視点を設定し、表や座標軸などに位置づけることで、それぞれの考えのよさを客観的に評価することができた。また、視点に基づいて絞り込みをすることで、提案理由や話し合いのカギに合う決定ができるようになった。

(2) よさやがんばりが認められる場の工夫

- ・ネームプレートの活用で一人一人の立場が明確になり、発言しない子や発言できない子の思いを位置づけることができた。
- ・話し合い活動の中では、友だちの意見に反応したり、つなげて発言したりすることで、肯定的な雰囲気の中で活動することができた。
- ・話し合いの進行を工夫して、振り返りの場の確保が可能になった。自己他者評価を交流することで、事後の活動や次回の話し合い活動への意欲へつなげることができた。

(3) キャリア教育の評価の活用

- ・今年度も、大分大学准教授・長谷川祐介先生の協力により、賀来小中独自の「キャリアアンケート」を実施した。キャリア発達の4つの力の調査項目と、昨年度より付加された学校生活に関する調査項目を、専門的に分析し、授業や生活指導の中に生かすことを意識して研究を進めることができた。
- ・今年度も、hyper-QUを実施し、5色の蛍光ペンを使った簡単で分かりやすい方法で分析を行った。学年部で分析結果を共通理解し、各学級の実態から気になる児童・生徒への配慮や声かけの仕方などについてチームで考えることができた。
- ・これらの分析を夏季休業中の全体研修で行うことで、全校や学年の傾向を共通理解し、方向性をもった指導・研究を行うことができ大変効果的であった。分析結果を生かした実践が、子どもの変容につながったと実感している。

(4) 「話し合い活動」に関する資料の整理

- ・縦割り3部会の中で、2年前に作成した話し合いマニュアル・評価規準・学級会用具などを見直し・改善して、整理・保存することができた。これにより、今後もよりよい情報をいつでも誰でも活用することができる。

(5) つながり・高め合う学校研究

- ・1学期の検証授業と事後研を全体研として行い、昨年度までの研究で築き上げてきた本校の学級会のスタイルと今年度の取り組むべき課題を全職員で共通理解し、方向性をもって学年部会、期別部会、縦割り3部会をすすめることができた。
- ・公式の授業研をなくし、実践重視の「普段着の授業研」「立ち話できる事後研」の回数を増やすことで、多様な話し合い活動を実践・参観することができた。
- ・一人一実践の互見授業を計画的に行うことで、各部会での研究を一人一人の教師が生かし、授業力向上へとつながった。

2 これから取り組むべき課題

- ・折り合いのつけ方には多様なパターンがあるので、今後も実践の中で子どもたちとともに開発し、議題に応じてより納得のいく集団決定ができるようにしていく。
- ・マニュアルに頼らず話し合い活動が進められるようになったときが、本音の交流のスタートである。そのためにも、話し合い活動を計画的に継続していくことが大切である。
- ・キャリアノート（ポートフォリオ）の有効な活用方法と、6年生から7年生への円滑な引継ぎ方法を考える。
- ・6年生までに培ってきた学級活動の内容を、7年生に進級後どうつないでいくかを模索していく必要がある。
- ・話し合い活動で培った力を、教科の学習にも活用していく。
- ・学校での取り組みを家庭・地域へ情報提供し、学校・家庭・地域が一つにつながって実践できるようにしていく。